

## 民具と生活文化 —新潟県佐渡郡小木町町場における 衣装箆笥をめぐる—

中村実央

筆者は一つのモノを通して何かが見えてくるのではないかと考え、その手段として新潟県佐渡郡小木町町場において、明治末期から大正期を中心に製作された小木箆笥と呼ばれる衣装箆笥を取り上げた。

佐渡島では八幡箆笥と呼ばれる桐箆笥も製作されたが、八幡の箆笥は北海道への移出向けから高級品まで、品質の段階が多かった。

箆笥は嫁入り道具として婚姻の習慣と結びつきが強く、小木町に限らず、島内各地の資料に嫁と箆笥の習慣に関する記述が見られる。

小木町は慶長期に町が開かれて以降、金銀の積出港・西廻り航路の寄港地などとして栄えた港町で、商人や船乗りたちが町人文化を展開したと言われる。

小木箆笥は小木町で盛んに製作された船箆笥の技術を受け継いで作られた。前板は堅い櫓で、内側は軟らかい桐でできている。厚くて大きい飾り金具が特徴である。昭和に入ってから生産は縮小していったが、最後の箆笥職人は昭和43年頃まで製作していた。

小木箆笥は製作に手間がかかるため非常に高価になり、誰もが持てるというものではなかった。

筆者は小木町町場の民家を中心に聞き取り調査を行い、本論では主に結婚に関わる内容を紹介した。また特に豪華だったと言われる芸者の箆笥についてもふれた。

小木町で明治生まれの人たちが結婚する頃まで行われていた結婚の儀式については、嫁が婚家に定着するかどうか分からない段階での、結納や嫁入りの儀式は簡素に行われる。この際にはまだ立派な箆笥は支度されない。出産後のマゴイリ・女の厄年の三十三・家督を譲る際のシキセなど、嫁が婚家で主婦になっていく過程の儀式においては、実家から

箆笥をはじめ布団・蚊帳などが贈られる。結婚に関する話を伺っていく中で、嫁が婚家に定着したというシンボルの一つとして箆笥をとらえ得ることが確認できた。

小木箆笥が非常に豪華なものになって人びとに受け入れられた背景として、外に対して羽振りをよく見せたという、商人社会に特徴的な気風が小木町にあったということが言えよう。これを裏付けるように、「小木の町の人には箆笥を人目につく居間に飾り、羽茂(隣町)の農家の人は蔵に入れて片づけてしまう」という話も聞かれた。

本研究ではモノを通してその背景にあるものを覗こうという当初の関心に、多少なりとも近づけたのではないかと考えている。また主に聞き取りの内容からテーマに迫ることもできたが、深い考察に結び付けるまでには至らなかった。より体系的に考察を発展させていくことが今後の課題である。

## 甲府の気温の日較差について

半間有希子

気温は気象要素の中で重要なものである。気温の日変化を表すものとして有効なのが気温の日較差である。気温の日較差は、気候の重要な指標であるといわれている。地理的分布によって変化し、ある一定の土地においては季節や他の気象要素が大きく影響する。農作物に与える影響も指摘されており、日較差の大きい地域では生活に欠かせぬ情報である。しかし、日較差は取り上げられることが少なく、どのような現象であるか具体的に解明されていない。今まで、定量的に解析した研究も行われていない。そこで、本研究では、全国的にみて日較差の大きい甲府を題材にして、20年間分の気温の日較差について解析を行い、その特性を明らかにすることを試みた。

データは、1976～1995年の20年間について、甲府地方気象台発行の「気象月報」の日

最高気温・日最低気温を用いた。解析方法は、まず、日最高気温・日最低気温により日較差を求めた。こうして得られた値を月毎に平均し、月平均値を求めた。これを基にして、20年間の月平均値で、日較差の季節変化を調べた。次に、月平均値を使って、日最高気温・日最低気温と日較差との相関を用いた。さらに、365日の日較差を20年分使って、ヒストグラムを求め、標準偏差によって月毎の変動の度合いを調べた。

解析の結果、以下のようなことがわかった。月平均値は、春季に最大で、冬季は春季との大差がなかった。しかし、最高気温・最低気温との相関においては、冬季は両方負の相関をするのに対し、春季は最高気温と正の相関を、最低気温と負の相関をする。秋季には春季同様の相関が見られた。夏季は、日較差が小さく両方正の相関となった。標準偏差によっては、夏季と冬季に変動が小さいことがわかった。また、暖候季には最高気温との相関が有意で、寒候季には最低気温との相関が有意な傾向を示した。

以上の結果を考察すると、地中伝導量と気団の面から考えることができる。日較差は、日射による日中の気温上昇と、放射冷却による夜間の気温降下によって生じる。よって、日射量の変化や放射冷却と関連した降水量の変化が日較差の季節毎の特徴を生み出す。また、夏季は小笠原気団、冬季はシベリア気団の影響を受けるので、夏季と冬季は変動が小さく、夏季には最低気温が上がるほど日較差が大きくなり、冬季には最高気温が下がるほど日較差が大きくなることが考えられる。

本研究では、甲府の気温の日較差は、大きさと質が季節によって違うことがわかった。今後の課題としては、気団との関係や甲府以外の地点についての解析を行うことが必要である。日較差がイネやブドウなど農作物に与える影響についても、今回の結果をふまえた研究が行われることを期待する。

## ミクロレベルの村落開発 プロジェクトと住民参加

—パラグアイ共和国、コロネルオピエド市  
における青年海外協力隊の活動事例より—

藤掛洋子

筆者は1992年12月より1995年3月まで南米パラグアイ共和国の農村において青年海外協力隊員として生活改善にかかる住民参加型のプロジェクトを実施してきた。

この論文は、そのプロジェクトを考察することを通し、住民参加型開発の問題点や可能性を検討し、今後の援助の方向性を考えるものである。

筆者は、今後、開発援助が持続可能であるためには住民参加型開発は不可欠であるという結論を導いた。また、プロジェクトの効率性と住民の動機づけも検討してきた。

住民参加型による持続可能な開発援助とは、地域の固有要因が把握された上で、地域住民の意見が十分吸い上げられ、地域住民自身が主体者となって計画・実施されたものである。また、地域住民の動機付けも重要である。論文の事例からもわかるように地域格差の認識から生じる「良いジェラシー」は開発援助において非常に強いインセンティブとして働く。それは、モデル地区やモデル村を設定することによりさらに効果が他の村にも波及するという点でもある。通常、プロジェクトは資金や期限が限られたものであるだけに、モデル地区の設定は有効であり、持続可能な開発には必要な要素でもある。

また、プロジェクトは何らかの形で評価されるべきである。問題点は改善されるべきであるし、効果を上げた点も踏まえてプロジェクトは事例として紹介されるべきである。また、今後、定性的データをどのように評価していくかということは我々の重要な課題でもある。

ところで、住民参加型の開発にも多くの問題点はある。草の根を目指し、プロジェクト